様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：８４３０１
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｈ０３５７４

研究課題名（和文）高雄曼荼羅の復元と空海の造形観の研究

研究課題名（英文）A Study on the Takao Mandala and Kukai's Views on Aesthetic Forms

研究代表者
松本　伸之（Matsumoto, Nobuyuki）

独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館・その他部局等・館長

研究者番号：３０２２９５６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　23,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、造形に深い関心を持った空海の造形観に関する研究である。中心となる研究対象作品である京都・神護寺所蔵の両界曼荼羅（高雄曼荼羅）は、空海が唐から持ち帰った彩色の曼荼羅を、空海の指導のもと金泥と銀泥を用いて写したもので、密教美術史上の最重要作品である。また、京都・東寺講堂の密教諸像は空海が像の構成を考え、造像時には工人を直接指導したと考えられる。そのため、両作品の表現には空海の考えが反映している可能性があり、重点的に考察を加えた。ほかに関連する絵画、彫刻等の作品の写真撮影等をおこなって研究資料の充実を図った。また、中国、インドネシアでの作品調査も実施し、日本の密教美術との関連を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　高雄曼荼羅は、唐留学中の空海が師恵果から授った彩色の曼荼羅を、空海の指導のもと金泥と銀泥を用いて写した両界曼荼羅で、密教美術史上の最重要作品である。本研究ではその高精細画像を撮影したほか、関連する絵画、彫刻等の作品の写真資料の充実も図り、今後の研究の基礎資料とすることができた。
　東京国立博物館で2019年に開催の特別展「国宝　東寺－空海と仏像曼荼羅」、2024年開催の特別展「神護寺－空海と真言密教のはじまり」の会場や展覧会図録等で本科研の研究成果である写真の掲載や解説を行い研究成果を国民に還元した。特に後者では高雄曼荼羅の巨大スクリーンへの映写、金銀泥に関する解説などをおこなう予定である。

研究成果の概要（英文）：This study looks into the monk Kukai’s deep interest in and approach to aesthetic forms.The main subject of this study is the Mandala of the Two Realms passed down at Jingoji Temple in Kyoto. Known as the “Takao Mandala,” it is a copy of a colored mandala that Kukai brought back from Tang China. Created under his guidance using gold and silver pigments, it is the most significant work in the history of esoteric Buddhist art.
Kukai is also believed to have directly instructed sculptors when designing the composition of the esoteric Buddhist statues known as the “Sculpture Mandala” in the Lecture Hall of To-ji Temple in Kyoto. It can be assumed that Kukai’s views are reflected in both these works, which have been studied most closely thus far. We have also built up our collection of materials by adding newly photographed paintings, sculptures, and other related works, and surveyed relevant works in China and Indonesia to analyze links between them and Japanese esoteric Buddhist art.

研究分野：日本東洋美術史

キーワード：空海　高雄曼荼羅　両界曼荼羅　密教美術　神護寺

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

「真言の奥深い教えは経や疏には詳しく書かれていないので、図画を用いなければ伝えることができない(真言秘蔵経疏隠密。不仮図画不能相伝)」(空海撰『御請来目録』)。空海が師の恵果から贈られた言葉である。同時に恵果は、経典、絵画、仏像なども空海に授けるが、その中に宮廷画家である李真に描かせた両界曼荼羅があった。

空海は造形に関して恵果と同じ考えを持っていたことは、空海の次の言葉から明らかである。「密教は奥深く、文筆で表し尽くすことはむずかしい。そこで図画をかりて悟らない者に開き示す（密蔵深玄翰墨難載。 更仮図画開示不悟。）」(『御請来目録』)。また空海は曼荼羅について「曼荼羅の仏は整然と森の木のように並び、赤や青さまざまな彩色が輝いている」（『性霊集』）と述べる。京都・東寺講堂の２１体の立体曼荼羅は空海の構想によるもので、金剛頂経と仁王経の思想に、奈良時代以来の伝統を加えるという複雑な構成ながら、諸仏が整然と並んだ様は、まさに空海の曼荼羅のイメージ通りである。

空海の造形観をうかがうことができる言葉はほかにも残っている。例えば、密教はそれが生まれたインドの文字や音声抜きには理解できないとするのもその一つで、空海は密教発祥のインドを重視した。高雄曼荼羅に描かれる諸像のインド的な身体表現は、空海の造形観と一致するものであったはずで、日本的な表現に置き換えられることはなかった。また、空海が請来した仏像（枕本尊)、そして東寺講堂諸像にもインド的な表現が見られるのである。

これまでの密教美術研究では、恵果や空海の言葉を引用して、密教や空海にとって造形は不可分であると常に説いてきたが、具体的な関係が議論されることはなく、また、空海の造形観についての研究もなかった。その背景には、空海に関連する作品の調査が十分でないという根本的な問題があったと思われる。

２．研究の目的

本研究は、造形に深い関心を示した空海の造形観に関する研究である。空海がそれについて直接言及することはなく、また空海が製作した造形作品が多く残るわけでもない。しかしながら、空海が製作に直接関与した高雄曼荼羅や、東寺講堂の密教諸像は後世まで密教美術の規範となった作品である。また、空海の書は後の書家に多大な影響を与えている。その空海の造形観を考察することは美術史研究上に欠くことができない作業である。そのためには関連する作品の調査や写真資料の作成をおこなう必要がある。それらの資料は今後の美術史研究に重要な役割を果たすはずである。

３．研究の方法

本研究チームは、これまでに高雄曼荼羅の全体を糸目まで確認できる高精細な画像を作成済である。それを用いて、高雄曼荼羅にどのような表現が見られるかということを考察するのが基本となる。その上で、関連する作品の調査を実施し、高雄曼荼羅と比較検討することによって高雄曼荼羅の特徴を際立て、背後にある製作意図を考察する。高雄曼荼羅は現存最古の両界曼荼羅であり、空海が師恵果より授けられた彩色の曼荼羅を空海自身の指導の下で金泥と銀泥で模写した作品である。彩色の曼荼羅の姿が伝わらないのは残念であるが、彩色ではなく金銀泥で模写したところに空海の意思（造形観）を読み解くヒントがあるはずである。

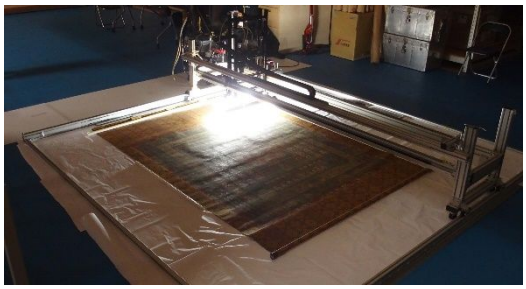
また、高雄曼荼羅と同じ空海請来の両界曼荼羅を基にしながら、高雄曼荼羅とは異なる系統の模写がある。その中で最も重要なのが東寺所蔵の甲本と称される両界曼荼羅である。甲本は１１９１年（建久２）に描かれたものであるが、空海によって高雄曼荼羅よりはやく模写された曼荼羅を原本としていて、空海請来の曼荼羅の系統の中で、彩色の両界曼荼羅としては最古の作品である。その系統として東寺所蔵の永仁本（１２９４年模写)、元禄本（１６９３年模写）などもある。また、高雄曼荼羅の系列の彩色模本には金剛峰寺所蔵の血曼荼羅と呼ばれる両界曼荼羅がある。これらの曼荼羅は表現的には製作された鎌倉時代のものであり、８世紀の中国絵画や、９世紀の日本絵画の表現とは異なるが、彩色が残っているため空海請来の両界曼荼羅の彩色を考察する上で不可欠な作品であり、比較検討をおこなう。

空海が構想し、造像を直接指導することもあったと考えられる東寺講堂の密教諸像も、空海の造形観を知るうえで重要である。インドの彫刻を思わせる筋肉質な表現は中国や日本の彫刻表現には定着しておらず、高雄曼荼羅に描かれる諸尊の肉身表現に近い。そこに空海の造形観が作用した可能性を考察する。

４．研究成果

本研究では特別展などの機会も利用して密教美術史上の重要作品の調査、写真資料の作成を行った。特に、大型スキャナや高精細カメラを用いて作成した多くの画像資料は今後の美術史研

究に活用できる基礎資料である。そのうちの主なものをあげれば、空海が師恵果から授けられた真言七祖像（東寺蔵）、現存最古の彩色による両界曼荼羅（西院曼荼羅）（同）、空海請来の系統である両界曼荼羅（甲本）（同）、高雄曼荼羅と同時代に製作された十二天像のうち２幅（西大寺蔵）、密教修法の場に用いられる山水屏風（京都・神護寺）。いずれも高雄曼荼羅の彩色を考えるうえで重要な作品である。西院曼荼羅はエキゾチックな彩色が見られる一方、後世の曼荼羅同様に身体表現は筋肉質ではなく、高雄曼荼羅との違いが指摘される。



スキャン作業風景

以上の絵画のほか、空海が造像を指導したと考えられる東寺講堂の密教諸像の写真撮影を実施した。密教諸像のうち不動明王は明らかに高雄曼荼羅の表現を取り入れている。菩薩像や梵天像の筋肉質な身体表現も同様で、それはインドの彫刻に起源が求められるだろう。密教発祥地であるインドを重視した空海の思想が反映しているとみられる。

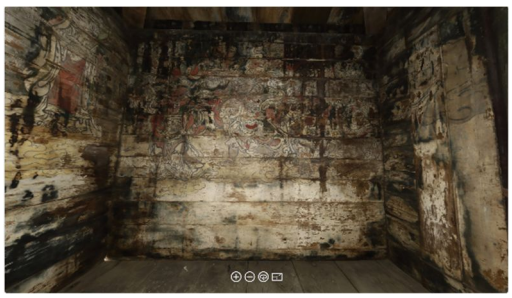
一部であるがＸ線断層写真（ＣＴ）の撮影もおこない、像の内部について貴重な情報を得ることができた。

東寺講堂

高雄曼荼羅については全体を糸目まで観察可能な画像を作成済みであったが、その後、同作品の修理が実施され、完成後の作品にたわみのない状態で大型スキャナによる１０００dpi のスキャンを実施した。作品にたわみがないうえ、スキャナによるため画像取得の際のゆがみもない完全な画像ということができる。カラーと赤外線の画像を作成した。

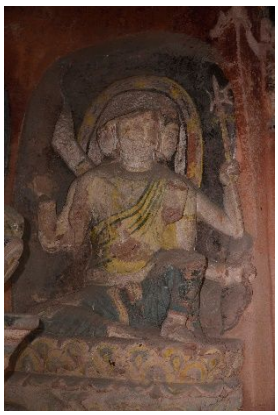
普段は見ることができない東京国立博物館所蔵の経蔵内部に描かれた仏画をＶＲカメラによって撮影した。それは隅々まで観察できるうえ、東京国立博物館のＨＰ上で公開しているので誰もがアクセス可能である。

これらの資料は、本研究中での活用は言うまでもないが、今後の美術史研究の基礎資料となるものである。



経蔵内部ＶＲ画像

海外での調査も実施した。一つは密教像が多く残らない中国であるが、四川省にはいくつかの作例が知られ、それらの調査を実施した。また、密教伝来にはシルクロード経由のほか、海を使った南方のルートがある。造形的にはよりインド的な表現の作品が残っている。その代表であるインドネシアのボロブドゥール遺跡とその周辺の遺跡を調査し、インド的な表現の広がりについて考察した。



四川省　磐陀寺

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 斎木 涼子	４．巻 24
２．論文標題 [論文] 『灌頂御願記』と『真言付法纂要抄』―真言宗における歴史書成立の背景―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 奈良国立博物館研究紀要 : 鹿園雑集 = Bulletin of the Nara National Museum: Rokuon Zassh?	６．最初と最後の頁 1～15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24737/00000789	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

東京国立博物館で2019年に開催された特別展「国宝　東寺―空海と仏像曼荼羅」の図録には、「東寺の密教美術と空海」（丸山士郎）、「文化交渉の重層的表象としての両界曼荼羅図」（沖松健次郎）、「立体曼荼羅の造立と空海の意図」（西木政統）、2024年開催予定の「神護寺―空海と真言密教のはじまり」の図録では「神護寺薬師如来立像と空海の造形観」（丸山士郎）、「高雄曼荼羅の金泥と銀泥」を執筆し研究成果を国民に向けて発信している。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	丸山　士郎 (Maruyama Shiro) (20249915)	独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・研究員 (82619)	
研究分担者	沖松　健次郎 (Okimatsu Kenjirou) (30332133)	独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・課長 (82619)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	和田　浩 (Wada Hiroshi) (60332136)	独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・課長 (82619)	
研究分担者	西木　政統 (Nishiki Masanori) (90740499)	独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・研究員 (82619)	
研究分担者	小泉　惠英 (Koizmi Yoshihide) (40205315)	独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館・副館長・副館長 (87106)	
研究分担者	伊藤　信二 (Ito Shinji) (00443622)	独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館・学芸部企画課・課長 (87106)	
研究分担者	大原　嘉豊 (Oohara Yoshitoyo) (90324699)	独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館・学芸部保存修理指導室・室長 (84301)	
研究分担者	斎木　涼子 (Saiki Ryoko) (90530634)	独立行政法人国立文化財機構奈良国立博物館・その他部局等・室長 (84603)	
研究分担者	安藤　香織 (Ando Kaori) (20555031)	公益財団法人徳川黎明会・徳川美術館・学芸員 (72623)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関